拝啓

蒼月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
拝啓

【Ｎコード】
Ｎ７０１３Ｙ

【作者名】
蒼月

【あらすじ】
以前短編だったものを連載にしました。
両親の死後、よく出来た弟が・・・・

さよなら日常、こんにちは非日常

拝啓、父さん、母さん。月日が経つのは早いもので、お二人が不慮の事故でこの世を去ってから数ヶ月が経ってしまいました。借家だったあの家はあの後、１ヶ月も経たずに心無い家主さんに追い出されてしまいました。まぁ、当然といえば当然なのですが・・・保護者も居ない未成年の人間に世間はとても冷たかったです。

でも捨てる神ばかりではありませんでした。２３軒目にして不動産屋さんがついに未成年でも貸してくれる物件を見つけてくれました。ちょっと問題ありのマンションのようなアパートでしたが、そこで私たちは新たな生活をスタートさせました。

少額ながらも掛けておいてくれたお二人の事故の保険金と加害者からの賠償金で暮らして行く生活にもだいぶ馴染んだ今日この頃、お二方の覚えめでたき品行方正の我が弟は、

「それ、ロン！　ダブル役満ッ！！」

立派に道を踏み外してしまいました。

「げッ？！　嘘だろ章生。俺ただでさえ負けてんのに・・・」

あの艶やかな黒髪は、今ではすっかり痛んでしまった金髪に。

「泣き言は受け付けないから、さっさと出すもん出せよ、彼方。」

左右の耳には軟骨も含めると計６個のピアス。

その上章生は・・・

「・・・あぁ、ハコテンだ。」

彼方と呼ばれた若干涙目の少年と、

「ぎゃはははは・・・」

下品に笑う少年。

「黙れ、健人。」

そして冷たいながらも知的な感じの腹黒少年らと共に、いつのまにやら暴走族になっていました。しかも総長と言う立場だそうです。更に信じられないことにチームの強さは上位に入るそうです。何位かなんてそんな恐ろしいことは聞きません。

「・・・かなちゃん、今日の昼メシなに？」

空気を読まない彼らの仲間のミチルが、勉強中のあたしの肩に顎を乗せる。

重いし痛いし退けてほしいんだが・・・

「・・・そうだねぇ、今日は夕べのシチューが残ってるからラザニアかグラタンにするよ。」

「やった！　俺グラタンがいい！　グラタンッ！！」

「あー、はいはい。グラタンね。」

そして父さん、母さん。あたしは彼らの食事係（おさんどん）にされてしまいました。

こう見えても、受験生なんだが

拝啓、父さん母さん。すっかり彼らの食事係にされてしまった私はいつものスーパーで買い物を済ませ、一路アパートを目指して歩いていました。なのに・・・なのになぜ私はこんな所に居るんでしょうか？！

純和風の大きな屋敷。そしてこれまた大きな座敷の中間で、スーパーの袋を片手に持ちつつ正座をしているあたしと、それに相対する形で強面の厳ついおじさんが胡坐を掻いている。あれだ・・・。考えたくも無いが、此処に来るまでの経緯と現在の現状からどう考えても考えても・・・・

「――鈴城叶（すずしろかなえ）だな？」

開口一番、おじさんがあたしの名前を口にする。

疑問符を付けているのにそう聞こえないのは何でだろう。まぁ兎に角、聞かれた事に対して無言で頷くとおじさんは目に見えて安堵の息を吐き、再び言葉を口にする。

「俺は神凪組の分家で、この白鴎組の組長をやってる陣明圭吾って言うもんだ。」

あ、やっぱり？　なんて口には出さないが、代わりに顔にはっき

りと出てしまったようだ。なんせ顔の筋肉がぴくぴくと引き攣るのだから。そんなこちらの状態もお構いなしに、何やら沁み々語りだす。

くどくどと、永遠に続くかと思ったおじさん・・元い、組長の話しは急な濫入者によって終わりを告げた。この話しを簡潔明瞭で言うならば、この組長はあたしたちの叔父だと言う。

母の実家が極道って訳ではなく、また父の実家も極道なんてものじゃない。じゃあなぜかって言うと、若い頃に父親（あたしからしたら祖父にあたるが）と大喧嘩をし、そのまま飛び出したそうだ、そして拾われた先がこの屋敷だと言う。それから一切の音沙汰も無く暮らしてたそうだが、ある経緯で母の事故の事を知り、残されたあたしたちに会いたくなったそうだ。

極道なら極道らしくそのままきれいスッパリ過去として葬り去って欲しかった。まぁ、正直？　身内が居たのは嬉しかったけど。けどあれだ。章生は兎も角あたしはごく普通の一般人。毎度半ば拉致られるように倉庫に連れて行かれるがあたしは一般人だ！！　しかも受験生！！　本来なら勉強に費やす時間を章生らに奪われて居る現在。一分一秒が今後の人生を左右する。そう断言してもいい！！

「――なので、帰っていいですか？」

恐ろ恐ろと顔を叔父さんに向けながら聞いたあたしに、とてもと

てもすばらしい――ええ、良い子も裸足で逃げ出さんばかりの笑顔を浮かべながら、濫入者とともに、

「此処が今日からお前の家だ。」

「此処が今日から俺たちの家だとよ。」

あぁ、父さん、母さん。中学浪人しても悪いのはあたしじゃありません。えぇッ！！　あたしが悪いわけじゃありませんともッ！！

桜咲けども、春は来ず

拝啓、父さん母さん。桜が無事に咲き、中学浪人だけは免れました。

えぇ、念願だった花の女子高生になった後は、いかに高校生活をエンジョイするかです。差し当たり、1年目で彼氏（出来ればイケメン）をゲットし、その後2年3年と順調に交際を続け、さらに就職した後は結婚相手も物色しつつ交際を続け・・・なんて将来設計を立てていました。

が、泣きそうです。いえ、比喩ではなくホントに泣きそうです。

入学式に喜び勇んで出席したのになぜかクラス発表の紙に名前がありません。あれ？　見落としたかなぁ？　なんて2度どころか5度見して確認しました。でもやっぱりありません。

明らかに不審者のような動きをしだしたあたしに教員らしきハゲ頭・・・失礼。頭頂部の寂しい・・・ってこれもダメだ。とりあえず訳が分からないため、その教員と共に職員室にお邪魔することにしました。

職員室に着き、詳しく知っていそうな教員の元へと案内され、色

々と説明を受けました。そしてあたしは暫し呆然自失の状態に。

「――え?！　でも確かに君の親御さんが手続きをして行ったよ?！」

「――両親、共に死んでますが・・・?」

呆然自失のまま蚊の泣く様な声（疑問符付ではあるが）で答えた一瞬の後、見る見る顔色を無くして行く教員が哀れで若干、頭の中を過った考えを言葉にした。

「あぁ・・でも、叔父が手続きしたのかもしれません・・・」

なんか思っていた事と違うと分かるとコロッと表情を変える教員と、まったく変わらず暗いままのあたし・・・。いや、ひょっとしてマンガによくある?どよーん?て言う効果音を纏ってるかも知れない。

しかも、しかも！　そんな状態のあたしを教員は追い出したのだ!!

「――そういう訳で君は本校の生徒ではなくなったから、本来君が行くべき高校に向かいなさい。」

諭すような優しい口調だが、教員の行動は別だった。

あれ？　あれれ？！　なんてよく分からないまま職員室から追い出され、尚且つ正門ではなく、裏門から？はい、さようなら？と・・・

目の前で門が閉められて行くと言うのに、それがどこか他人事のような気がしてイマイチ現実感が沸かない。けれど、帰り際に渡された１枚の紙がこれは現実の事だと物語る。

桜咲けども、春は来ず　Part 2

拝啓、父さん母さん。目の前にとても大きくて素晴らしくキレイな学校と、窓ガラスが割られ、あちこち壁が壊されている廃校寸前の学校が見えます。そしてここで問題です。叔父さんが転入手続きを取った学校はどっちでしょう？

A，キレイな学校

B，廃校寸前の学校。

「あれ？　ヤマちゃん。席ひとつ多くね？」

「あぁ、今日は転校生が来んだ。」

「転校生？！　入学式の日に転校生？！」

「あぁそうだ。名前は確か・・・」

「あ、あった。名前は鈴城叶(すずしろかなう)だってさ。」

「なんでおまえが生徒(それ)名簿を持ってる・・・・・？」

上から順に生徒A，担任、生徒B，担任、生徒C、担任・・・のやり取りがドアの越しに聞こえて来ていた。それと生徒B，あたしの名前は叶(かなう)ではなく叶(かなえ)です。

それと父さん母さん。この馬鹿げたやり取りで気づいたと思いますが先程の問題の答えは察しの通りB，の廃校寸前の学校です。ちなみにこの学校、叔父が経営する学校らしく、その所為かどうか知りませんが教員がどう見てもヤクザにしか見えません。いままですれ違った生徒もヤクザの予備軍見たいな感じになっていて、皆さんどこかしこの族に所属してそうです。だって校舎内外問わずに現在進行形で仁義なき戦いが勃発してました。ちなみにここに章生の姿はありません。あ、落ちてませんよ？　ってか落ちる訳ないですよね、章生はあたしと違って頭良いから。――章生はさっさと推薦決めて進学校に入学(いき)ました。内申より点数で決まったらしいです。（なんであたしが転校で章生は自分が望んだ高校に行けんでしょうか。理不尽です。）

そんな理不尽な思いにうんうん、と呻っていたあたしですが、時間は止まる事無く過ぎて行くため仕方なしに目の前にある教室の入り口のドアを開けました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7013y/

拝啓

2011年11月22日01時12分発行